

## 小学生のコミュニケーション力を高める教育実践(2)

—教育学部・教育学研究科教育心理学学生によるボランティアな取り組み—

廣岡 秀一<sup>1)</sup>・中西 良文<sup>1)</sup>・廣岡 雅子<sup>2)</sup>・後藤 淳子<sup>3)</sup>  
横矢 規<sup>3)</sup>・矢神 祥代<sup>3)</sup>・福田 真知<sup>3)</sup>

三重大学教育学部教育心理学教室の大学生・大学院生を中心とするグループは、ボランティアに小学生の「コミュニケーション能力」育成の実践を行う「土曜わくわくクラブ」を三重県津市立M小学校で開始した。本論文は、「土曜わくわくクラブ」の秋クラスで行われた活動について、各回に行われたプログラムをその心理学的背景、活動中の子どもの様子や感想、改善点などとともに紹介し、広く情報を提供することを目的とした。加えて、活動の主体である教育学部の大学生・大学院生自身の社会性の発達や教育力の発達にも注目し、スタッフとして参加した大学生・大学院生の活動後の感想を取り上げた探索的検討もあわせて行った。

### はじめに

子どもの対人関係や対社会関係能力の低下について多くの指摘がなされている(e.g., 吉田, 1997)。そして、このような問題に対する対策を求める声も大きいといえよう。

このような問題への対策の1つのあり方として、地域の「ボランティア」が学校教育の場面とは異なる場面で社会性を刺激するという活動に関わるという形があり得る(廣岡・中西・廣岡・後藤・横矢・矢神・福田, 2005)。このような活動として、三重大学教育学部教育心理学教室の大学生・大学院生を中心とするグループはボランティアに小学生の「コミュニケーション能力」育成の実践を行う「土曜わくわくクラブ」を三重県津市立M小学校で開始した。本論文では、「土曜わくわくクラブ」の秋クラスで行われた活動について、各回に行われたプログラムをその心理学的背景(ねらい)、活動中の子どもの様子や感想、改善点などとともに紹介し、広く情報を提供することを目指す。

ところで、このような活動が子どもの発達においてどのような効果をもつのかについて客観的な視点から検討してみることは、教育現場での実践的研究においても非常に重要な視点となる。そこで本論文では、探索的な形ではあるがその点についても検討を試みる。その方法として、まず社会的スキルを測定する尺度を用い、活動参加による得点変化について検討を行う。それに加え、参加児童に感想を尋ね、そこでの記述をもとに子どもが感じた主観的な効果について検討する。さらに、参加児童の保護者による感想も間接的データとして用い、活動の

効果を探索的にではあるが検討することを試みる。

さて、本研究におけるボランティア活動では、教育学部の大学生・大学院生が中心となって活動を行っている。活動の対象になっている子どもの変化という視点は当然のこととして、活動の主体であるところの教育学部の大学生・大学院生自身の社会性の発達や教育力の発達に目を向けてみることも重要な視点となる。子どもの社会性や子どもとの関わりについて熟考し、グループ内で議論を重ねながらも調整された成案を作成していく、さらにそれを現実の子どもを対象とした実践へと展開していくことを何度か繰り返すことによって、何らかの無視できない変化が学生にも生じると考えるのは、さほど無理のあることではないだろう。例えば、子どもとの関わりを通じて、教育に関する関心やものの見方の変化が見られることは容易に考えられるし、その活動の中で展開されている集団活動そのものがある種の社会性の涵養につながっていると考えることも大いに可能であろう。

本論文では、このような点にも注目し、スタッフとして参加した大学生・大学院生の活動後の感想を取り上げた検討もあわせて行う。

### 活動の概要

#### 1. 活動日時

2004年9月から同12月まで、全6回を土曜日の午前10時～12時の120分間に実施した。

#### 2. 活動場所

津市立M小学校図書室

1) 三重大学教育学部 e-mail:shuhiro@edu.mie-u.ac.jp  
2) 三重大学教育学部附属中学校非常勤カウンセラー  
3) 三重大学大学院教育学研究科

### 3. 対象

M小学校の4～6年生21名(6年男子1名、同女子1名、5年男子4名、4年男子5名、同女子10名)。

本活動はすでに1学期に24名の児童の参加を得て行われていたが、2学期に改めて募集したところ、2/3の16名が再参加となった。

### 4. 活動立案・実施者<sup>4)</sup>

三重大学教育学部教員2名、同大学院教育学研究科学生4名、同修了者2名、教育学部学生8名、同卒業生1名、同研究生1名の、計18名。なお、この活動立案・実施者を以下「スタッフ」と呼ぶ。

### 5. 本活動で使用する言葉

#### ①ふり返りシート

毎回の活動終了時に、活動内容の達成度や満足度を4件法で記入し、活動の感想を書くシートである。子どもに活動の定着を図るためと、スタッフが次回以降の活動に活かしていくために使用した。

#### ②わくわくトライ

活動内容の定着のために家庭で次回までに行う課題。

### 6. 活動立案の過程

各回を2人のスタッフが企画立案し、それを毎週1回のミーティングでスタッフ全員により改良された上で毎回のプログラムが決定された。立案に当たり、吉田・廣岡・斎藤(2002、2005)、吉田・小川・出口・斎藤・坂本・廣岡・石田・元吉(2000)、斎藤・小川・坂本・出口・小池・廣岡・石田・吉田(2002)、岡田(1996)、吉田(2002a)、吉田(2002b)、滝(2001)などの授業プログラムを参考にした。

### 7. スタッフの役割

小グループ活動を基本とし、児童を4グループに分けた。各グループにはスタッフ2人ずつが担当となり、グループ活動の進行役や活動の援助、わくわくトライ・ふり返りシートのチェックなどを行った。企画立案した2人はその回の授業者を務めた。残りのスタッフは、全体把握や個別的な関わり、授業者やグループリーダーの援助、活動の記録撮影などを行った。

本活動は、楽しく温かく安心できる雰囲気の中でのコミュニケーション力の向上を目的としているので、スタッフは、子どもに対し共感と肯定的関わりを基本とした。

### 8. 活動の開示

Webサイト(<http://www.s-hirooka.com/wakuwaku/>)で活動を公開した。活動の案内、毎回の活動の記録、次回予告、スタッフ紹介、掲示板、募集案内のページを用

意し、毎回の活動の記録を随時更新した。

## 第1回活動(2004年9月18日) 気持ちのいいあいさつで友だちと仲良くなろう

### 1. 活動目的

あいさつのコツを試して気持ちのいいあいさつができるように意識づけ、グループ内の関係を深める。

### 2. 活動内容

#### ①土曜わくわくクラブの説明(15分)

わくわくクラブ、ノート、活動のルールの説明とスタッフ紹介を行った。

#### ②ウォーミングアップ「えんぴつゲーム」(10分)

2人が向き合い、削っていない鉛筆の両端をそれぞれ人差し指1本で支え、鉛筆を落とさないように動き回った。授業者から「両手をあげる」などの指示が出された。

#### ③エクササイズ1「グループ分け」(40分)

##### 1) なかまさがしパズル

4組のパズルが用意された。それぞれ1つの絵がグループの員数に切り分けられたパズルのピースを無作為に子どもに配り、子どもは自分のピースと合うピースをさがした。こうして同じパズルを構成した仲間ですれぞれのグループが作られた。

##### 2) 名札づくり

B5大の紙に、年組、ニックネーム、グループ名を書いて名札を作成し、紐をつけた。グループ名はグループで相談して決めた。活動時にはこの名札を身につけた。

#### ④休憩(10分)

#### ⑤エクササイズ2「友だちしょうかい」(35分)

##### 1) 「あいさつのコツ」

もじもじタイプ、ぶっきらぼうタイプ、さわやかタイプの3人のあいさつをスタッフが演じて、さわやかタイプのあいさつが一番気持ちがいいことを確認し、1) 相手を見て言う、2) はっきり言う、3) 心をこめて言う、4) ちょうどいい大きさの声で言う、というあいさつの4つのコツを説明した。

##### 2) 「友だちしょうかい」

グループの中でペアを作り、好きな科目など決められた質問をお互いに聞き合ったあと、相手の回答をグループで順に紹介していった。この際、「あいさつのコツ」を意識するように促された。

#### ⑥ふり返りシートの記入・わくわくトライ(10分)

わくわくトライは、次回までに「誰と、どんな時に、

4) 本稿の著者以外の活動スタッフは、秋山美和、細谷美由紀(以上、学校教育コース53期)、中井伊都、神戸淳一、伊藤靖子(人間発達科学課程53期)、横井聡子(人間発達科学課程52期)、三吉啓子、安田有里(人間発達科学課程54期)、奥野絵里奈(人間発達科学課程55期)、雨宮靖樹(教育学研究科学校教育専攻修了)、岸田由佳(内地留学生:三重県小学校教諭)である。彼らは、授業の立案から授業の実践、さらにはすべての回の活動記録を詳細にとるとともに、本稿を執筆するための資料作成に多大な貢献をしてくれた。彼らの貢献なくして本稿の完成はなかったと断言できるきわめて重要な役割を果たしてくれたことを付記しておく。

どんなあいさつをし、あいさつのコツがどれだけできたか」を記録することだった。

### 3. 子どもの感想と活動中の様子

感想に「はじめてだったけど楽しかった」とあったように、みんな楽しそうに活動に参加していた。えんぴつゲームは、授業者が動作を指示することで大いに盛り上がった。最初に体を動かしたことによって子どもの緊張もほぐれたようだ。なかまさがしパズルでは、仲間を探すためにいろいろな子どもとピースを見せ合って楽しく活動できた。友だちしょうかいでは、グループで聞き合うことができ、お互いのことを知るよい機会となったようだ。

### 4. 問題点・改善点

グループ分けの結果、グループによって活発さに偏りが生じてしまった。グループ構成を操作する必要もある。あいさつのコツでは、授業の意図が明確すぎたために子どもの興味が低下したので、興味を持たせるような工夫が必要だった。

## 第2回活動 (同年10月2日)

### みんなで作って楽しもう! わくわくすごろく

#### 1. 活動目的

人を楽しませるようなすごろくをグループで協力して作り上げ、達成感と連帯感を得る。また、作られたすごろくで遊んで楽しさを味わい、交流を深める。

#### 2. 活動内容

①ウォーミングアップ「伝言ゲーム」(10分)

②前回のわくわくトライの確認(10分)

③エクササイズ1「わくわくすごろく作り」(40分)

グループで1つのすごろくを作りあげた。すごろくのタイトルを決めてから、1枚の模造紙にスタート・ゴール・マスを相談して配置し、スタートからゴールまでをつなぐ道筋を記入した(付表1参照)。マスには、1回休み、5つ進む、あいさつの4つのコツを言う、などがあった。各グループのタイトルは「海」、「世界一周旅行」、「ハロウィーン」、「パイナップル遊園地」であった。

④休憩(5分)

⑤エクササイズ2「すごろくで遊ぼう」(30分)

作る時に工夫した点などを発表した後、自分の作ったすごろくで遊んだ。さらに、他のグループが作ったすごろくから自分がしたいものを1つ選んで遊んだ。

⑥シェアリングとまとめ(10分)

遊んだ感想と、すごろくのおもしろかったところ、工夫されているところを全体に発表した。

⑦ふり返しシートの記入・わくわくトライ(15分)

わくわくトライは、「家族や友人などを楽しい気持ちにさせてくれること」を課題とした。

### 3. 子どもの感想と活動中の様子

伝言ゲームは、スタッフの名前や滑稽な表現を含んだ文章が伝言されたため、楽しめた様子であった。わくわくすごろく作りでは、グループで話し合う時に、うまく話し合えずに制限時間内に意見をまとめることがむずかしいグループも見られたが、その後の作成作業ではグループで楽しく協力することができた。ふり返しシートで「できあがったすごろくが気に入った」と答えていた子どもが多かった。すごろくで遊ぼうでは、どのグループも楽しく遊ぶことができ、子ども同士の交流を深めることができた。シェアリングでは、活発に意見交換ができ、「人を楽しませるすごろくをみんなで作ることができた」と達成感・満足感を味わったようである。

### 4. 問題点・改善点

わくわくすごろく作りは、遊ぶ時間を十分にとれず、全員がゴールする前に遊びを終了しなければならなかったのが残念だった。話し合いの様子から、人の意見を上手に聞き調整する、ということが今後の課題となった。人の意見を聞くことが大切なこと、話し合いによってよりよい意見が生まれることを実感させるために、話し合いのスキルを意識させる経験を積む必要があろう。

## 第3回活動 (同年10月16日)

### わくわく大捜査線—協力して犯人を捜そう!

#### 1. 活動目的

グループで問題解決課題に取り組むことによって、話し合いのスキルを向上させ、グループで協力することで、達成感を得たり交流を深めたりする。

#### 2. 活動内容

①ウォーミングアップ「わくわくバスケット」(10分)

何でもバスケットの要領で行った。ただし、鬼は「朝おはようと言った人」など、感情やあいさつに関係するお題カードを読み上げることとした。

②前回のわくわくトライの確認(10分)

③エクササイズ「わくわく大捜査線」(85分)

##### 1) 推理ゲーム

滝(2001)のプログラムを参考にして作成された情報収集ゲームであった。ある「殺人事件」について、グループ毎に子どもとスタッフが刑事役に扮し、各刑事に配られた情報カードを手掛かりに協力して犯人を推理し、事件が解決された。

事件を早く正確に解決するために、ゲームの前に話し合いのコツが提示された。話す時のコツは、1) みんなにむかって、2) みんなに聞こえやすい声で、3) はっきりと、話すことの3つであり、聞く時のコツは、1) 話す人のほうに体をむけて、2) 話す人の顔を見て、3) よそ見をしつたりせずに、4) 最後まで、聞くことの4つで

ある。

## 2) 推理結果の発表とシェアリング

グループ毎に、推理した犯人とその理由が発表されてから、授業者によって真犯人とその理由が説明された。その後、推理のための話し合いについてシェアリングを行った。

## ④ふり返しシートの記入・わくわくトライ (15分)

わくわくトライは、友だちに頼む場面と断る場面の絵が印刷されたプリントの中のふきだしに「普段の自分の頼み方・断り方」と、「こう言えたらいいと思う頼み方・断り方」を書くことだった。

## 3. 子どもの感想と活動中の様子

わくわくバスケットは、楽しかったという声も多かったが、あまり席を移動しない子どももいて盛り上がりには欠けたようだった。わくわく大捜査線は、どの子どもも身を乗り出して推理に熱中し、お互いに意見を出し合って解決に向かって協力する様子が見られた。しかし、犯人の見当がついてきた頃に他のグループにわざと犯人を教えようとしたりする子どもがいたので、その子どもについてはスタッフが個別に対応した。

## 4. 問題点・改善点

わくわくバスケットで席を移動する子どもが少なかったのは、「最近怒った人」など、自分がそれに該当するかを考えるのに時間がかかったという可能性もあった。わくわく大捜査線は、ゲームに熱中しすぎたため「話し合いのコツ」を子どもに十分意識させることができなかつたので、シェアリングの時に「コツ」が適切に使われていたことに気づかせるべきだった。

## 第4回活動 (同年10月30日) ものの見方のクセに気づき、 いろいろな可能性を考えよう

### 1. 活動目的

人間のものの見方には、クセ、思い込み、決めつけがあることに気づかせ、多様な見方や考え方をしよう意識づける。

### 2. 活動内容

#### ①ウォーミングアップ「グループで連想ゲーム」(10分)

「わくわくクラブ」という言葉から連想する言葉を2分間にできるだけたくさん書き出し、書いた言葉数をグループ同士で競った。

#### ②エクササイズ1「グループ分け」(30分)

##### 1) グループ分け連想ゲーム

「感情を表す言葉」を3分間に書き出させ、書いた言葉数の多い順に新しいグループに割り振った。

##### 2) 紹介リレー・グループ名決め

「あいさつのコツ」を思い出してグループ毎に自己紹

介を行った後、グループ名を決めた。

#### ③エクササイズ2「くらべてみよう」(20分)

パワーポイントを利用して4つの錯視図形を順にプロジェクターで映して見え方を尋ねた後、パワーポイントのアニメーションを使って視覚的に確認し、錯視図形のプリントによって実測確認した。こうして、人には見方のクセがあり、同じ長さや大きさでも周囲の図形に影響されて違って見えることがあることを実感させた。

#### ④休憩 (5分)

#### ⑤エクササイズ3「これなあに？」(15分)

斎藤ら(2002)による2種類の多義図形のプリント(Figure1、Figure2)を配付し、グループで多義図形が何に見えるかを話し合わせ、発表させた。プロジェクターを使用して、同じ図形が周囲の情報によって違うものに見えることを確認した。

### これなあに？

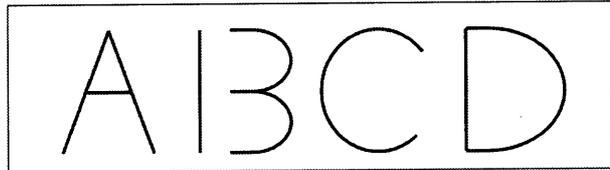
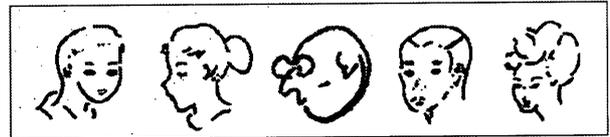


Figure 1 第4回「これなあに？」の多義図形1  
(上段では真ん中の図、下段では左から2番目の図が多義図形)

### これなあに？

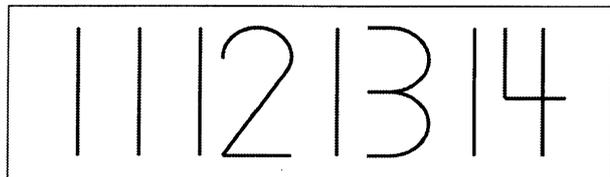
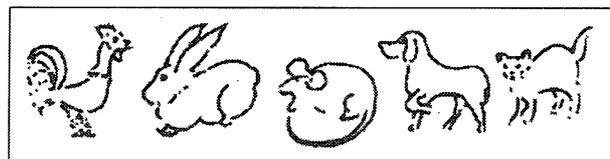


Figure 2 第4回「これなあに？」の多義図形2  
(上段では真ん中の図、下段では左から3番目の図が多義図形)

#### ⑥エクササイズ4「もしかしたら」(30分)

1) ドラえもんキャラクターを活用して、それぞれのキャラクターの印象によって会話の内容を決めつけてしまうこと、2) 両手を広げ「通さないよ!」と言って

いる人の絵 (斎藤ら、2002) を見せ、1つの行動や状況から人を決めつけてしまうこと、3) おはようと言ったのに友達に無視されて嫌な奴だと思っている子の絵 (吉田、2002a) を見せ、友だちが本当に嫌な奴なのか、の3場面を考えさせ、同じ行動でも事実と違う見方をしてしまうことや「もしかしたら」といろいろ考えてみる必要があることを伝えた。

⑦ふり返りシート・わくわくトライ (10分)

わくわくトライは、掃除の時間に座り込んでいる友だちを見て「彼は不真面目な奴だ」と思っている場面の絵 (吉田、2002b) のプリントから、彼が座りこんでいる他の理由を考えてくることだった。

3. 子どもの感想と活動中の様子

連想ゲームのやり方がわからない子どもがいたが、身近にいるスタッフの説明によって取り組むことができた。連想ゲームがおもしろかったと答えた子どもが多かった。プロジェクターの使用や錯視図形のアニメーション提示など珍しい課題を取り上げたことが子どもの興味を引き、真剣に話を聞いたり集中して活動に取り組んでいる子どもが多かった。普段はあまり発言しない子どもも積極的に意見を発表していた。

4. 問題点・改善点

連想ゲームのやり方の説明を十分にすべきだった。また、本時に取り上げた錯視図形をすでに知っている数人の子どもにとっては、少し退屈だったようである。120分に多くの活動が詰め込まれていたため、子どもに多少負担だったようなので、本時の活動を2回に分けて実施した方が効果的だったかもしれない。

第5回活動 (同年11月20日)  
観察力と感情表現を養おう

1. 活動目的

他者に対する観察力を鍛える。また、感情を表す様々な言葉を知り、感情を実際に表現・推測することによって、感情についての関心を高める。

2. 活動内容

①ウォーミングアップ「猛獣狩りに行こうよ」(10分)

「猛獣狩りに行こうよ」を歌に合わせて踊ったあと、授業者が言う猛獣の名前の文字数分の人数が集まった。

②第3回のわくわくトライの確認 (10分)

回収していた「頼み方・断り方」のプリントを返却し、頼み方のコツと断り方のコツを確認してから、数人の回答を聞き合った。頼み方のコツは、1) 頼み事をする理由を言う、2) 頼みたいことを具体的に言う、3) 頼み事がかなえられたらどういう気持ちになるかを言う、の3つであり、断り方のコツは、1) あやまる、2) 断る理由を言う、3) 断ることをはっきり言う、4) 代替りの意見

を言う、の4つである。

③エクササイズ1「わくわくましがいがし」(20分)

各グループ5人ずつが出題者となり、5人のうち1人1カ所までグループで合計3カ所を正面から見てわかる範囲で変えさせて、変える前と変えた後を他の子どもが観察し、誰のどの場所が最初と変わったのかを当てた。

④エクササイズ2「気持ちのなかまさがし」(20分)

感情を表す言葉50個を、グループで相談しながら提示された7種類の表情に分類し (付表2参照)、全体に発表した。

⑤エクササイズ3「どきどき福笑い」(30分)

顔の輪郭、目、口、眉のパーツの福笑いセットを用意し、2、3人の小グループごとに「気持ちのなかまさがし」で使った感情の言葉の中から1つを決めてその表情を作った。その後、他のグループが作った表情がどんな感情の言葉を表しているかを3択クイズにして当てさせた (Figure3、Figure4)。

⑥社会的スキルの測定 (15分)

本活動の初期 (2004年4月) と後期 (同年11月) で子どもの社会的スキルの変化を検討するために、初期に

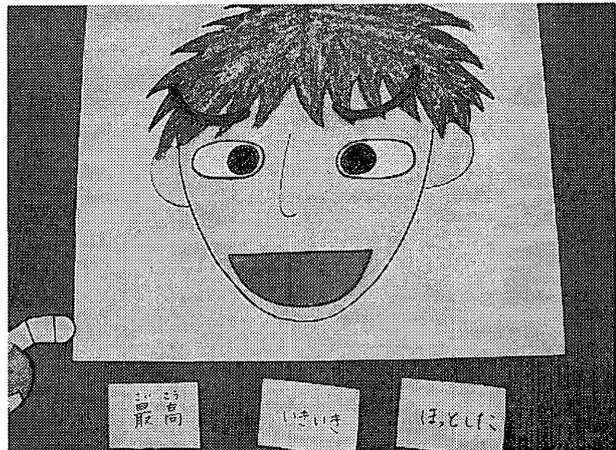


Figure 3 第5回「どきどき福笑い」作品例1



Figure 4 第5回「どきどき福笑い」作品例2

実施したものと同一社会的スキル尺度（戸ヶ崎・坂野、1997）による測定を実施した。

⑦ふり返りシートの記入・わくわくトライ（15分）

わくわくトライは、子どもが「スタッフへの手紙」を書いてくると、自分の保護者に「保護者へのアンケート」の記入を依頼することだった。

3. 子どもの感想と活動中の様子

猛獣狩りに行こうよでは、踊りや歌を恥ずかしがる子どももいたが、ゲーム自体は楽しんでいる様子だった。頼み方・断り方の発表では、当てられた子どもは恥ずかしかったが、スタッフの励ましで発表でき、褒められるといういい経験ができた。まちがいさがしは、非常に盛りあがった。出題者は真剣に相談し、答える側は細かく観察し、特にむずかしいところを当てた子どもは得意そうだった。気持ちのなかまさがしでは、グループによって感情の言葉の分類の方法が様々であった。また、言葉によってはどの表情に分類するのか意見が分かれていた。どきどき福笑いでは、豊かな発想でいろいろな表情を作って遊ぶ姿が見られた。その奇抜さ多様さにはスタッフも驚かされ、みんなで楽しむことができた。

4. 問題点・改善点

気持ちのなかまさがしでは、言葉を分類する作業を通じて、自分と人の受け取り方が違うということに気づかせたかったが、みんなで共有することが難しかった。感じ方の違いに焦点化できるような改善が必要だろう。

第6回活動（同年12月4日）  
わくわくふりかえり

1. 活動目的

一連の活動で学んだことをコミュニケーションスキルを使って楽しくふり返る。また、肯定的なメッセージを受けて自他の長所を認め合い、温かな人間関係の中で活動を修了する。

2. 活動内容

①ウォーミングアップ「ハンカチおとし」（10分）

②第4回のわくわくトライの確認（10分）

「もしかしたら」の子どもの回答を紹介し、相手が本当に思っていることを知るためには、実際に相手に率直にたずねてみるのがよいということを確認した。

③エクササイズ1「わくわく思い出クイズ」（30分）

これまでの活動を、活動中の写真をプロジェクターで提示しながらふり返った。活動にちなんだクイズを挿入してそれぞれの活動のねらいをもう一度確認した。

④エクササイズ2「修了証のプレゼント」（10分）

グループ毎にスタッフからの肯定的なメッセージが書かれた修了証が読み上げられた後、各自に渡された。お互いの長所を確認するとともに、秋クラスの修了を喜び

合った。

⑤休憩（5分）

⑥エクササイズ3「わくわくまちがいさがし」（25分）

人気の高かったまちがいさがしゲームを楽しんだ。

⑦スタッフのお別れ一言メッセージ（20分）

⑧ふり返りシートの記入（10分）

3. 子どもの感想と活動中の様子

「もしかしたら」の確認では、多くの可能性を考えることができたが、本当のことを確かめるためには「本人に聞いてみたらいい」という意見が子どもからすぐに出た。わくわく思い出クイズは、写真の提示によって鮮明に思い出すことができ、写真に自分が登場すると喜んでいった。しかし、クイズを解くことに夢中で他のグループの発表や授業者の説明を聞いていない場面もあった。スタッフが修了証を読み上げた時は恥ずかしがる子どももいたが、どの子どもも受け取って嬉しそうだった。当初の予定通りに今回でこの活動が終わることが伝えられても、またやってほしいという声が聞かれた。活動全体の感想では、「友だちと協力して行う活動が楽しかった」というものが多かった。本活動を通して、人と関わることの楽しさを実感できたものと思われる。また、「わくわくクラブの友だちやスタッフに会えてよかった」と答えた子どもが多く、子どもの居場所としての役割も果たしていたと言えよう。

4. 問題点・改善点

わくわく思い出クイズでは、正解者にみんなで拍手を送るなど子どもの発言に注目させメリハリをつける工夫も必要だった。修了証は、他の子どもの修了証も最後までみんなで聞き合い、友だちの長所に注目させるようにスタッフがもっと働きかけるべきであった。

社会的スキル尺度での検討

1学期から本活動に参加してデータが得られた14名の社会的スキルについて、初期と後期を比較したところ、2/3以上の子どもに社会的スキル尺度の下位因子である関係参加行動因子得点の上昇が見られた。逆に関係維持行動因子と関係向上行動因子の得点には2/3以上の子どもに低下が見られた。普段は消極的な子どもが本活動にだんだん積極的に参加できるようになったことが関係参加行動の上昇理由と思われるが、他の2因子の得点低下については、次のような理由が考えられる。まず、初期には自分ではできていると思って気軽に評定していたが、できていなかったことがわかってきて、より厳しい基準で判断するようになった可能性が考えられる。あるいは、最初は評価懸念によって実際より「できる」と評定していたが、本活動の雰囲気の中で、実際の自分に近い評定ができるようになったとも考えられる。また、

スキル尺度に表れるほどの変化を与えるには活動が短すぎた可能性もあろう。しかし、社会的スキル尺度の測定結果からは、本活動によって社会的スキルが獲得されたかどうかを明確にすることはできなかった。

## 感想からみる活動の効果

### 1. 子どもの感想から

第5回のわくわくトライとして課した「スタッフへの手紙」から特徴的なものをいくつか紹介する。

- ・僕は土曜わくわくクラブのおかげで、友達とのかかわりがUPしました。また、このような場面でこのようなへんじをするんや等、意外なへんじのしかたもおしえていただきました(5年生男子)。
- ・今までありがとさん。最初は恥ずかしかったけど、今はもーへいきです(4年生女子)。
- ・スタッフさんがかんがえてくれたゲームがたのしかったし、土曜日になるといつも「今日は何をしてくれるのかな?」と思いました(4年生女子)。

このように、お礼の言葉や楽しかったという感想が目立った。この活動を楽しみにし、スタッフや仲間との関係の中で恥ずかしがらずに参加できるようになっただけでなく、具体的に友だちとの関わりややりとりの仕方などコミュニケーション力についても刺激を受けた様子を読み取ることができる。

### 2. 保護者の感想から

第5回のわくわくトライとして課した「保護者の方へアンケートのお願い」からいくつかを紹介する。

- ・自分から積極的に話ができるように少しずつ変わってきた気がします(4年生女子の保護者)。
- ・友達とのコミュニケーションがあまり上手ではないのでクラブになじめるか不安に思っていたのですが、意外な位、初回から「めっちゃ楽しかった!」と話してくれ、それは今も同じです。コミュニケーションという難しい題材で、子ども達の興味を上手く引き出してくれている様子を感じました(4年生女子の保護者)。
- ・評価ではなく、認めてもらえることのこころ良さを体験させていただける、良い時間を過ごさせてもらえました。「自分から提案していいんだ…」と嬉しかったようです。また、「グループがえ」を何度か経験することによって、いろいろなタイプの子と会話することやともに考えることのおもしろさがわかりはじめてきた様子です(6年生男子の保護者)。

このように、子どものコミュニケーション力について言及した感想もいくつか見られた。また、保護者が、子どもが楽しそうに参加していることやこの活動に期待を寄せていることが読み取れた。

### 3. スタッフの感想から

全ての活動が終わった後のスタッフの感想からいくつか紹介する。

- ・最初は恥ずかしがっていた子どもが発表をしたり、わくわくクラブを心地よい場所だと思っていたり、友だちの意見を聴けるようになったりと、子どもたちのちょっとした変化を間近で見ることができて、「こういうことに関わってみてよかった」と思った。スタッフの仲間の子もたちへの関わり方を見て、自分も試してみることができた(大学院1年)。
- ・子どもたちはいろんな目的をもって来ているけど、ここがとても居心地がいい場所になっている子どもも確かにいた。学校では活躍できない子ども、ここでは認めてもらえる。実際に「スタッフの人たちは待ってくれる」というコメントをくれている子どももいた(学部4年生)。
- ・20人近くいたスタッフの個々の対応はすごく勉強になった。最初は戸惑ってばかりで、視野も狭かったが、慣れるに従い、こういう子には話を聞いてあげ方がいい、あいう子には一緒になって遊んだ方がいいということがなんとなくわかってきた(大学院2年)。
- ・はじめは、ミーティングは活動をするために必要なもの、という位置づけでしかなかったけれど、ミーティングで、案を練ったり議論したり感想を言ったりしているうちに、ミーティングそのものの意味も感じるようになった。相手に分かるように表現することは難しく、伝えてつもりでも誤解が生じていたり伝わってなかったりして、本当にコミュニケーション力の必要性を痛感した。また、他の人の意見を聞いて新たな考えが生まれたり、新たなもの、よりよいものになっていく過程がとてもおもしろかった(学部4年生)。

これらから、スタッフの、子どもの細かい変化にも気を配り、工夫しながら自分なりのやり方で子どもと関わる姿、また、ミーティングや活動の中で他のスタッフから様々な刺激を受け、自分自身の視野を広げたり、成長させたりしている姿を読み取ることができる。これらは子どもや他のスタッフという他者についての考慮を通じて行われるものであるといえ、このことからスタッフにおいてもある意味でのコミュニケーション力向上が導かれたといえるのではないだろうか。子どもへの気配りができることや他のスタッフと協調的に作業を進めていけることは、教育者として重要な能力であろう。このような活動にスタッフとして参加することは教育者としてのある種の資質を高めることに貢献する可能性は小さくない。

本活動は、参加した子どもだけでなく、その変化を見守った保護者、力を合わせて活動を作り上げたスタッフにとっても意味のあるものであったと言えるだろう。

## 課 題

本活動は、子どものコミュニケーション力を刺激するための活動であった。エクササイズをはじめとするプログラムを計画、実施することに主眼があったため、効果については社会的スキル尺度を測定したのみであったが、尺度上の変化をこの活動だけの効果と断定することはできない。そのため、今後同様の活動においても同様の結果が見られるかについて検討される必要があるだろう。また、本研究で用いた社会的スキル尺度に取り上げられていたスキルが、本研究での活動の効果をj知るために妥当であったかについても検討の余地がある。この問題は、このような活動においてどのようなスキルを身につけさせることが重要なのか、という問題にもつながるであろう。その1つの参考となりそうなものが、本研究で子どもから得られた「楽しい」という感想なのかもしれない。コミュニケーション力を高めるためには、それを高めることが大切だという志向性が重要になる。そのコミュニケーション志向性にとって、他者との関係性を「楽しい」と感じられることは、他者との関係を築く前提となる重要な条件になりうる。いずれにしても、社会的なスキルを尺度による測定というものだけに頼らず、回収された感想なども参考にして、総合的にスキルの変化や活動の効果を捉えることができる方法を考案する必要がある。

また、参加したスタッフの変化について検討することは、このような活動の担い手を育て、広げるためにも有用なことであり、スタッフとして関わる意味づけを生み出すものともなるであろう。

## さいごに

本論文は、主に活動のプログラムを報告するものであったが、今後これらを生かして様々な活動が行われることを期待したい。本研究で検討した保護者からの感想においては、子どものコミュニケーション力に関する言及が見られた。これは子どもからそのような力が感じられるようになったためと捉えられる一方、本活動のような「コミュニケーション力」を高めるとうたう活動が身近にあることで、子どもの持つべき能力の1つとして「コミュニケーション力」というものが存在するという考えが生みだされたためともいえるのではないだろうか。すなわち、このような活動が、それに関わっている子どもたちに影響を与えただけではなく、その周囲の人々にも

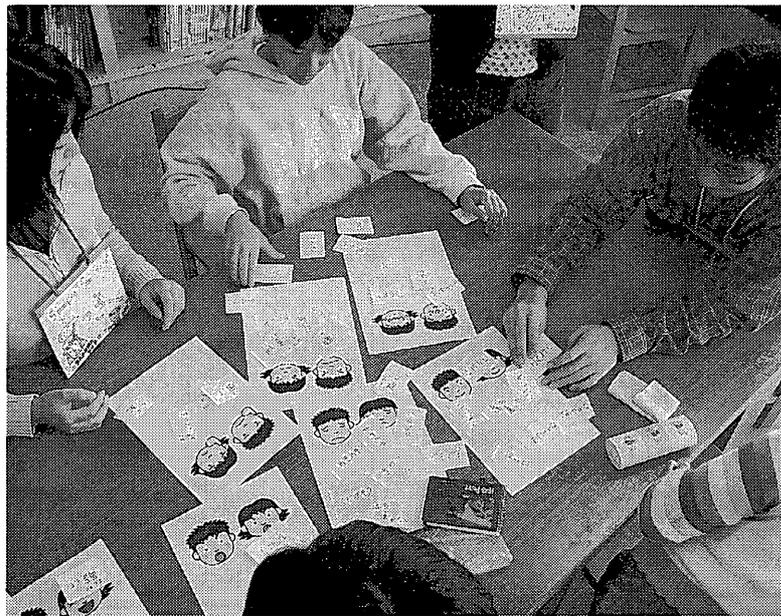
「コミュニケーション力」を高めることが重要だというコミュニケーション志向性を刺激したと考えられるのである。そういった意味では、このような活動が地域における「コミュニケーション力育成への関心」を高めることにもつながるといえなくもない。今後、このような活動が様々な地域で実践され、広く社会全体のコミュニケーション力が向上することを期待したい。

## 引用文献

- 廣岡秀一・中西良文・廣岡雅子・後藤淳子・横矢規・矢神祥代・福田真知 2005 小学生のコミュニケーション力を高める教育実践 三重大学教育学部研究紀要、56、301-313.
- 岡田弘(編) 1996 エンカウンターで学級が変わる—小学校編— 図書文化
- 斎藤和志・小川一美・坂本剛・出口拓彦・小池はるか・廣岡秀一・石田靖彦・吉田俊和 2002 「社会志向性」と「社会的コンピテンス」を教育する(3)—中学2年生を対象とした授業実践— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学)、49、227-245.
- 滝充(編) 2001 ピア・サポートではじめる学校づくり小学校編 「総合的な学習の時間」に行う「心の教育」 金子書房
- 戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1997 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応に及ぼす影響—積極的拒否型の養育態度の観点から— 教育心理学研究、45、173-182.
- 吉田俊和・廣岡秀一・斎藤和志(編) 2002 教室で学ぶ「社会の中の人間行動」—心理学を活用した新しい授業例— 明治図書
- 吉田俊和・廣岡秀一・斎藤和志(編) 2005 「人間」や「社会」に対する関心を高める教育—心理学を利用した社会性を育む授業例— 明治図書
- 吉田俊和・小川一美・出口拓彦・斎藤和志・坂本剛・廣岡秀一・石田靖彦・元吉忠寛 2000 「社会志向性」と「社会的コンピテンス」を教育する—中学1年生を対象とした授業実践— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学)、47、301-315.
- 吉田寿夫 2002a 人についての思い込み I 北大路書房 pp.17
- 吉田寿夫 2002b 人についての思い込み II 北大路書房 pp.10



付表1 第2回「わくわくすごろく」作成風景



付表2 第5回「気持ちのなかまさがし」の分類活動